
バカと世界と禁書目録

暮灘雪夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと世界と禁書目録

【Nコード】

N3936Y

【作者名】

暮灘雪夜

【あらすじ】

それはとても小さな…
でも大切な…

【あいとゆづじょうのおとぎばなし】

「いっぽーはいっぽーだよ。例え記憶を失ったいてもね」

「アキヒサ、だぁ〜い好きなんだよ」

「記憶なんざア無くて、なんとかなるもんだぜ？」

「失いたくない…だからっ！！」

「大丈夫。そんなあきひさをわたしは応援してる。ずっと…」

この物語に英雄は出てこないかもしれません。

だって、”お伽話”ですから。

皆で幸せになるには、僅かなの英雄より大切な物がきつとある…

例えば、そんなおとぎ話…

どうも、暮灘です（^^）；

無謀にも、また執筆衝動を抑えきれず、連載を初めてしまいました
（汗）

基本的に、

明久単独 禁書目録世界

というコンセプトの作品です。

だから、禁書板かバカテス板か迷いましたが、こちらにしました（

—)

また1〜3話までは前に【吉井明久を様々な世界の色々なヒロインと絡ませてみた】に掲載した物を大幅に加筆修正した物を、4話以降から未発表エピソードとなります。

このようなコンセプトの作品で不定期連載になると思いますが、楽しんで頂ければ幸いですm(_____)m

第1話 "バカといっぱーと禁書目録"; (前書き)

皆様、おはようございまーす

暮灘の作品コンセプト集

【吉井明久を様々な世界の色々なヒロインと絡ませてみた】

からスピオフさせて、ついに連載を初めてしまいました(^^;;
まずは、原作で言う【禁書目録編】をゴールに定めて書いていきたくないあ〜と。

既に上記の”明久色々”で掲載していた第1話を表現の甘い部分を中心に加筆修正したのがこの第1話です。

4

内容は次回予告風に書くと…

学園都市で比較的平和(?)な時間を過ごしていた吉井明久
しかし…

「えっと…僕、シスターさんなんか干してたっけ?」

一つの出会いが、彼の日常を変えてゆく…

そして、

「明久クウウン」

間近に聞こえる”第一位”の声！

今回、【バカといっぱーと禁書目録】

科学と魔法が融合した街で、物語はゆっくりと幕開ける！

こんな感じのエピソードですが楽しんで頂ければ幸いです) o > .
,) b

第1話 " バカといっぱーと禁書目録";

皆さんは、【学園都市】って知ってるかな？

えーと、僕が住んでる街ことなんだけどね

えっ？

知ってる？

じゃあ、この街が出来た由来や経緯はどうかな？

へえ…

みんなが知ってる【学園都市】ってかなり物騒なんだね？

”お前の世界”は違うのかって？

うん。大分、違う…と思う。

そもそも、僕の住んでる【学園都市】が設立された目的は、

《最先端の科学と古代からの英知である魔法の積極的な融合を研究
すること》

なんだ。

そして、僕が生まれる何年前：【学園都市】は、その”最初の存フェア在意義”を示す事に成功した。

”シェリー・クロムウェル”

”エリス・マツカートニー”

多分、【学園都市】でこの二人の名前を知らない人はいない。

僕が生まれる何年前になるから…20年くらい前かな？

【学園都市】で行われた実験で、シェリーさんは【始めて超能力を使った魔術師】になったし、エリスさんは【始めて魔術を使った能力者】になったんだ。

ある意味、それまで良くて色物、悪くて異端扱いだった学園都市の真価が世間に認知され始めたのは、それからだったのかもしれないね。

えっ？ 二人とも生きてるのかって？

…質問の意図がよく分からないけど、今も二人とも学園都市で【魔法と能力の近似性と相違】って感じの研究を、揃って大学教授になった今でも続けてるよ？

僕もシェリー先生やエリス先生主催のセミナーや講演会によく行く

し、しっかり大学のオープン・キャンパスのゼミに登録してるしね
っ

なんでって？

うーん…細かく言うと長くなるから、簡単にはしよるけど、僕の両腕に宿る”力”…

【ゼロ・スコア零点回帰】

って言うんだけど…

この力が、まだ能力なのか魔術的なのかハッキリしないんだよ。

こういうケースってごく希あるらしくて、隣の部屋に歳上の彼女と一緒に住んでる当麻…

彼女とラヴラヴ同棲中の上条当麻の右手に宿る【幻想殺し（イメージン・ブレイカー）】も似たような区分らしいからなあ。

（僕のゼロ・スコアと当麻のイメージン・ブレイカーって性質も似てるしね…）

ただ、専門家に言わせると似ていて非なる物…効果が似てるだけで、原理は全く別らしい。

（当麻は文字通り”異能力破壊”で、僕は”ホメロスタシス”に近い性質かあ…）

まあ、それはそのうち詳しくね？

某年7月20日

全ての始まりの日…

act-1

” 腹ペコシスターがやって来た！！ ”

僕は今のところ魔術でも能力でもない【力】を除けば、かなり普通
な人間だと思う。

ああ、そう言えば自己紹介がまだだったっけ？

僕は【吉井明久】。

とある高校に通う一年生だよ

能力は前に書いたけど、未分類の【ゼロ・スコア零点回帰】。レベルは、当然のように「Unknown」。

そりゃあ、魔術でもない能力にも該当しない力…

”物差し”が作れない以上、レベルが不明なのはしょうがないよね？

友達は変わり者が多いし、魔術でも能力でもない力のせいで色々な所から呼び出されるけど、でもそれ以外は特に幸福でも不幸でもない…と思う。

だから、”不測の事態”って、それほど経験が多い訳じゃないんだよ。

だから、ある晴れた休日、お布団を干そうとベランダに出たら、何故かもう布団が干されてて、その布団をよく見たら…

「え〜と…僕、シスターさんなんか干してたっけ…？」

ベランダに干されていた…それとも、引っかかっている？のは、何となくウエツジウッドとかの白磁の”ティーカップに似た印象”の真っ白の修道服を着たちみっこいシスターさんで、

「お腹へった…」

なんて、白くてちみっこいシスターさんにベランダから眩かれる経験は、生まれて初めてでありましたとさ…

というか…

(普通は無いよね?)

「お腹減ったって言うてるんだよ?」

何故か疑問形のその可愛いシスターさんに僕は、

「それは僕に『何か喰わせる』と要求してるって解釈していいのかな?」

「うん 理解が早くて助かるんだよ」

…

…

…

…

… まあ、いつか。

(急な来客には慣れてるしねえ)

まあ…こんな珍妙な来訪は、初めてだけぞ。

「手っ取り早く食べれる物と、美味しく食べれる物、どっちがいい？」

するとちみっこいシスターは本当に満面の笑顔で、

「手っ取り早く食べて、尚且つ美味しい物がいい！」

寧ろ清々しくなるくらいキツパリと言い切りましたとさ。

「う〜ん…なるべくリクエストには答えられるように努力はするよ。でも、その前に…」

僕はシスターさんの両方の脇の下に手を入れて…

”ふわっ”

(うわぁ…軽い)

「にやにやにや!?!」

僕に抱き上げられたせいなのか、シスターさんは顔を真っ赤にして猫みたいなき声を上げるけど、

「ベランダにぶら下がったまんまじゃ、ご飯は食べられないでしょ？ 可愛いシスターさん」

「はう…」

あれ？ 何だか大人しくなっちゃった。

運びやすいから良いけどね

act - 2

” 禁書目録にDedicatus…かあ ”

「シスターさん、炒飯と焼きそばどっちがいい？ って言うか炒飯と焼きそばって料理、わかる？」

すると借りてきた猫みたいに座布団にチョココンと座るちみっこいシスターさんは、

「どっちもわかるよ　それに両方！」

「炭水化物と炭水化物の夢のコラボレーションになっちゃうけど？」

「そのコラボ、むしろ上等なんだよ　えっと、それと私の事は【インデックス】って呼んで欲しいんだよ」

（”インデックス”…コードネームか何かかな？）

僕は中華鍋にゴマ油を流して、ある程度暖まった所に溶き卵を入れながら…

「それって、索引ちゃんとか、見出しちゃんって意味かな？」

「ううん。【禁書目録】って意味なんだけど…あつ、魔法名は【D
educatus545】、”献身的な子羊は強者の知識を守る”
って意味だね」

えっ？

それって…

「【禁書目録】って、もしかして【Index Librorum
Prohibitorum】のこと？ 1564年にローマ十字
正教の教皇によって制定されて、1966年に廃止されるまで存在
していたっていう【反十字教書物のブラックリスト】って感じの…
？」

すると、シスター改め”インデックス”は少し驚いた顔で、

「君、随分詳しいんだねえ…」

僕は【自分の力の”根源”】が知りたくて、能力関係と一緒に魔術
関係の本とか読み漁ってるから…歴史とかラテン語とかは、その流
れで詳しくなっただよ。

まあ、そつちに時間を取られてるせいで普通の勉強はからっきし、まさに【バカまっしぐら】だけどね（笑）

それはともかく、

「それで、”Dedicatus”って…僕のラテン語知識が確かなら、【神に完全に捧げる事を宣言する】って意味になるんじゃないかな？」

「君、ラテン語までわかるの？ 若く見えるけど、君は学者さんかなのかな？」

「ラテン語は、かじった程度だけど。あつ、僕は明久。吉井明久。学者どころか、どちらかと言えばデキの悪い部類の学生だよ」

シエリー先生やエリス先生曰く、魔法や魔術を理解するには、

【過去へ過去へと遡り、それが成立した経緯や根源】

まで理解しないと本当の意味では理解できない…らしいから、僕もそうしてるとて訳。

シエリー先生に言わせれば、

『科学は未来へ未来へ進む学問だけどね、魔法や魔術は時間の積み重ねで成立する。時間のベクトルが真逆なんだよ』

って事らしい。

まあ、そういうシエリー先生も、ルーンの解析にコンピュータ使ったり、ゴーレム錬成の術式を刻むのにチヨークだけじゃなくてハンディ・レーザー使ったりするけどね

「アキヒサ…アキヒサだね」

なんか嬉しそうなインデックスだけど、

「ところで、インデックス…一つ聞いていい？」

「うん　アキヒサは命の恩人だもん！　わたしに答えられる事なら、なんだって答えるよ？」

「じゃあ…」魔法名”を名乗ったって事は、ご飯を作らせた後、僕をサクツって殺っちゃうつもりなのかな？って…」

(確か、魔法名ってそういう用法じゃなかったっけ？)

でも、僕の言葉にインデックスはいかにも心外って顔で、

「そんなことしないもんっ！！」

act - 3

” 友達がコーヒー豆と一緒にやって来た”

「アキヒサ、天才なんだよっ！！ スツゴくスツゴく美味しいんだよっ！！ ここまで美味しいと、きつとお腹好いて無くても美味しいって思っただよっ！！」

「そ、そっかな？ そこまで喜んで貰えると、照れ臭いけど嬉しいよ」

あゝもう、口の回りソースだらけじゃん。

「喋りながら食べるから…インデックス、こっち向いて」

僕はティッシュを手にとってインデックスの口の回りを拭いてみる。

「はい。これでよっつと」

するとインデックスは、ちよっぴり頬を赤くして、

「ねえ…アキヒサってもしかして、凄く”世話好きな人”…なのかな？」

「かもね。周囲に何かとほっとけない人が多かったし、今も多いから」

色々と思い出して、僕は思わず苦笑してしまう。

それは、インデックスの皿上の残量が少ない事を確認した僕が、ちよつど立ち上がるうとした時だ。

”あつきひさクウウウー”

「な、何つ、今の不気味な声っ!? ”マクンバ呪歌” 何か!?」

「ああ、友達が来たみたい。うん、今のは【音を媒介する空気振動】を”ベクトル操作”した音なんだ。簡単に言えば、指向性スピーカーみたいなものだよ」

チンパンカンパンな顔をするインデックスに、僕は「ちょっと待ってて」と言い残し、席を立って玄関に向かう。

そして、ガチャとドアを開けると、立っていた無造作に切り揃えた長めの白髪頭で、ヒョロつとした印象の”友達”に、

「やっほ、”いっぽー”。今日はどうしたの?」

「コーヒー煎れてくれ」

と、”いっぽー”…通称【一方通行】アクセラレーターは、玄関に入るなり、僕にビニール袋に入った紙袋を手渡す。
開けて見ると、

「コーヒー豆？ 店で挽いてもらわなかったの？」

「店で挽かせたら、持っていくまでに薫りが飛ぶだろオが。それに明久が挽いた方が美味エンだよ」

いっぽーのコーヒーへの拘りは半端じゃないからなあ。

「ん、わかったよ なら、いっぽーの期待に応えないとね。あつ、いつまでも玄関に居ないで上がりなよ？ あつ、お客さん来てるけど、同席でいい？」

いっぽー…強面^{つよめ}だけど、意外と人見知りだからなあ。
一応、断っておかないと。

「客だア？ 俺の知ってる奴かア？」

僕は首を左右に振り、

「多分、誰も知らないと思う。多分、英国清教系のちみつこいシスターで、ベランダに引っ掛かった」

「アアン？」

いっばーは思い切り怪訝な顔をするけど、事実だしなあ…

僕といっばーは家に入りながら、

「あれ？ そういえば、”あいちゃん”に”うみちゃん”は？
—
緒じゃないの？」

「ああ。最愛と海鳥は”バイト”だ」

「バイト？ ああ、【アイテム】かあ。沈利さんのところなら、まあ大丈夫かな？ 最近は危ない橋を渡ってないって噂だし」

沈利さんって言うのは、フルネームを【まきのしんり麦野沈利】さんって言って、特殊能力者部隊【アイテム】のリーダーさん。

熊もびつくりなぐらい鮭料理が大好きで、最近はゴッツい彼氏ができたらしいって噂があるんだよね〜

アイテムには僕の友達も所属してるから…

（この間、差し入れに鮭弁を作って持っていったら、大喜びされたっけ）

…おかげで、危うく【アイテム専属料理人】にされかけたけど。

「…ンで、妹どもと合流するまでの時間潰しに来たんだがヨォ…タイミング悪かったか？」

「ううん。いっぱいならいつでも大歓迎だよ」

「…明久のそばにやたら人が集まるワケ、解る気がするぜ…」

「…いっぽーは何か呟いたみたいだけど、音声を拡散させたのか僕にはよく聞こえ無かったよ。」

第1話 "バカといっぱーと禁書目録"; (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございますm(_____)m

もう、正規連載三本という暮灘の無茶苦茶な無軌道さを、きっと皆様は呆れ苦笑してるだろうな〜と思ってる暮灘です(^^);

”明久色々”で既に読まれてる方も多いと思いますが…皆様、如何だったでしょうか？(汗)

実際、この物語は禁書目録のストーリーをなぞりながら、明久を主人公に据えて、よりハッピーな方向に原作を再構築しようというコンセプトの物語です。

多分…

【当麻が主人公じゃないと許せない】

【当麻が不幸じゃないと許せない】

【というか、明久が主人公じゃなくても…】

という読者の皆様にはとことん合わない物語になってしまつと思ひます(;^_^A

それでも構わないという読者の皆様、これからますます鼻唄くだると
作者として、とても嬉しく思います(――)

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ(o^_^)(b

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3936y/>

バカと世界と禁書目録

2011年11月10日09時34分発行